



昭和四年
(一九一九)五月
皇居内の覆馬場で
剣道の天覧試合が
おこなわれた。



対決する
二人の剣士は
法神流、持田
盛一、範士と
小野派一刀流
高野茂義
範士だよ

決勝 (準決勝)
高野 茂義 大麻 勇次
持田 盛一 植田 盛一
植田 平太郎



二人の剣士は
全国から
えらばれた
三十二人の剣道
の達人から
勝ち残った
二人だ



持田 範士
四十五歳
高野 範士
五十三歳

もり じ 盛 二



日本一の剣士に
なった持田は
宮本武蔵の
再来といわれた

昭和4年の御大典天覧武道大会では全国から集まった32人の指定選士と闘い、決勝で兄弟子・高野茂義範士をも破り名実共に「日本一」に。その後も警視庁・慶応・学習院・陸軍(旧)学校・田制(高)講談社の師範などを歴任する一方「百戦百勝」の勢いで「昭和の宮本武蔵」とも呼ばれた。昭和32年に10段位に登り、昭和49年2月に天命を全うするまでついに「敗れる」ことはなかった。座右の銘は「平常心」。前橋公園の一角に頌徳碑が建立されている。



一本目

群馬のスポーツ人 ⑥ "昭和の宮本武蔵" もち だ 持 田



自分は
全国の剣士を
門弟にして
いるといつて
道場を
もたなかったよ

上泉伊勢守の神陰流、馬庭念流、法神流と数々の流派、剣豪を生んだ上州に明治・大正・昭和と3代にわたり剣の道を追求した「昭和の剣聖」持田盛二が誕生したのは明治18年1月26日。法神流免許皆伝の父・善作と長兄・愛作の励まして戦前まで日本剣道界の総本山・大日本武徳会(京都)に入学、3年の教員養成課程を半年の1年6カ月で卒業、京都・千葉・朝鮮で師範を務め、昭和2年、42歳で史上最年少の範士として後進の育成、剣道振興に活躍。



持田が
一本目を
とったあと
はげしい
たたかいが
つづいた。



まさに持田は
無敵で
昭和四十九年
一月九日
八十九歳で
なくなるまで
百戦百勝
まけることが
なかったんだ



天覧試合に
かった持田は
昭和天皇から
日本刀一振り
うけたんだよ



ついに
日本一だ
ここまで
これたのも
父や兄の
おかげだ

兄には
しごかれ
たっけ



小手あり
それまで